慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世開物思想の一考察
Sub Title	Study of "thought of development" in th Tokugawa period
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.5 (1978. 10) ,p.648(20)- 670(42)
JaLC DOI	10.14991/001.19781001-0020
Abstract	
Notes	遊部久蔵教授追悼特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19781001-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近世開物思想の一考察

島崎隆夫

目次

はしがき
1. 天と地と人と——宮崎安貞「農業全書」
2. 仁政とは富有——熊沢蕃山「大学或問」
3. 食—地力を尽す，貨—交易——太宰春台「経済録」
4. 「開国産」と「楮幣の制」——林子平「上書」
5. 壮大な開物の主張——本多利明「経世秘策」
6. 勧農の道——藤田幽谷と会沢正志斉
7. 経済之学＝経済道の基根としての開物——佐藤信渕「経済要録」
むすび

はしがき

わが国近世経済思想は，種々の思想的立場から，多くの思想家により，豊かに形成されたのであるが，いずれの思想にあっても，その理論が中国古代思想，とりわけ儒学思想を援用して構成された面が強い。この儒学は近世社会において，封建教学・権威の学であり，名分論としての一側面をもつと共に，民生・利用厚生の面を持っている。政治・統治を意味する広義の経済（経世済民）論は名分論に立つ政治論であると共に，政治を支える物的基礎である狭義の経済——富・貧困・生産・民生・利用厚生・消費・蓄積——をつねに意識して形成されている。

この小論で，わたくしは儒学思想のもつ民生・利用厚生の側面に注目し，財の生産，産業の発展，産業技術にかかわる思想，これは古くから素朴な形で存在しているのであるが，それが一定の歴史的条件の下で，「開物」として意識され，経済論の基礎におかれて行った事情を考察してみたいと思う。この場合，わたくしは，日本思想大系45「安藤昌益・佐藤信渕」（1972，岩波書店）集中に「天柱記」「経済要略」「混同秘策」「垂統秘録」の四本を校注した仕事の継続として，佐藤信渕の開物思想の研究に焦点をあわせて考察を加えてみたいと思う。信渕の開物思想は18世紀後半より19世紀前半にかけての日本の歴史的状況下で生れた問題に対する一つの解答の仕方であり，信渕より以前，あるいは同時代の経世家が，色々の立場から多くの解答をこころみたのであるが，それらはいずれ

も虚学ではなく，実学的主張であるという特色をもち，生産・産業の開発＝開物の意図を強く示し，それぞれの主張の根底においている事実にわたくしは注目している。思想史的に直接的な連関性を指摘することは困難であるが，わたくしが今日まで若干検討してきた思想家を対象として生産，産業開発，開物に関する思想を検討することによって，信渕の開物思想の形成とその特質を理解する一助にしたいと考え，宮崎安貞，熊沢蕃山，太宰春台，林子平，本多利明，藤田幽谷，会沢正志斉等にみられる生産―開物思想の在り方に検討を加えてみた。本論での思想家の選出がやや恣意的であるという謗はまねかれないであろう。本論の趣旨にそうためには，三浦梅園や信渕の同時代人である二宮尊徳，大蔵永常等の生産・開物思想を加えるべきであったと考える。

生産・産業・開物の思想の形成は，幕末・明治維新期以降の日本近代化，産業技術，西欧近代経済思想の吸収による近代産業のいちじるしい発展とそこにみられる特色を準備しつつあった思想的土壌の形成の一場面ではないかと考え，敢て検討を加えんとしたものである。

1.

「それ農人耕作の事，其理り至りて深し。稲を生ずる物は天也。是を養ふものは地なり。人は中にゐて天の気により土地の宜きに順ひ，時を以て耕作をつとむ。もし其勤なくば天地の生養も逐ぐべからず。」[(1)]は宮崎安貞（元和9年・1623―元禄10年・1697）の辛苦の結晶たる「農業全書」（元禄10年・1697年に初版刊行，この年よりおよそ90年を経た天明7年・1786年に再版本が刊行された。天明期に本書が再版されたことは銘記すべきである。）の冒頭の一節である。

杉本勲氏が「日本実学史の研究」において，わが国「実学」の成立史を検討された時，旧来の道学より経験科学的な学問への急転回が江戸中期に行なわれ，経験科学者ないし技術学者が活躍した事実に注目し，氏は其等の学者の一人に宮崎安貞をあげ，農業全書に展開されている農学を重視している。[(2)]この時期に思弁の学としての儒学にたいして経験的・実証的な「実学」の誕生があったのである。安貞は貝原楽軒・益軒と親交があり，この益軒には「菜譜」（宝永元年・1704），「花譜」（元禄7年・1694），「大和本草」（宝永6年・1709）等本草学の実学的仕事があり，[(3)]この益軒の本草学・農学の成立は，宋応星「天工開物」（明末の崇禎10年・1637の出版，わが国においては明和8年・1771に，大阪の書林菅生堂より訓点と送りがなを施して和刻本として出版されて，原書と共に広く注目され，わが国の多くの人々に影響を与えた）と深い関連があることが，例えば元禄7年の「花譜」の参考書目として益軒が「天工開物」をあげ，さらに宝永6年「大和本草」に益軒が「天工開物」を引用していること

注（1）宮崎安貞「農業全書」（岩波文庫版）47頁。
（2）杉本勲「日本実学史の研究」，総説第1章（18頁）第2章（46頁）第3章（62頁）第4章（108頁），等を参照。
（3）同上「日本実学史の研究」総説第1章（18頁）第2章（44頁）。

が，藪内清「天工開物」[4]解説で指摘されている。楽軒・益軒と安貞との密接な関連を古島敏雄氏は「日本農学史」[5]で指摘されているが，益軒・安貞の活動をこの小論が検討せんとする主題を解明する緒とするために，安貞「農業全書」の冒頭の一節をあげたのである。

さて，「大和本草」や「菜譜」等多くの本草書を叙述するとき，益軒は一般庶民にとって有用な品をしたしく採集観察し民用之万一を小補すること，すなわち民生のために少しでも役だたんがためを目的としていた。[6]同時代人である安貞が「農業全書」を著述せんとした目的も，[7]同じ社会的要請にこたえんとしたものであって，それは農業生産向上，民生の維持・発展を目的とし，当時基本的に重要である「農術」に対する無知・軽視をなくすために，農民の立場に立って，農業技術を説くに至った。安貞が説いた農業技術は主として水田＝稲作栽培技術，穀作技術であったが，それのみでなく同時に先進地帯に発展しつつあった商業的農業や換金作物栽培技術をもふくんでいた。ただ本書が農業全書であったところから，その叙述対象が農業に限定され，さらに広範囲に鉱山，工業等の諸産業及び産業技術，一般に「開物」[8]といわれるものにまで言及することの無かったのは当然であろう。かくて，安貞の農学の中に「元禄期においてはやくも民衆的基盤のうえにたつ技術学＝経験科学の典型をみいだすことができると思う」[9]と杉本氏はまとめている。

上にかかげた「農業全書」冒頭の一節をみると，農業生産＝耕作をみるとき，「天・地・人」の三者がそれぞれ重要な役割を演じている。すなわち植物の生育における「天・地」の役割は，「稲を生ずるものは天，これを養ふものは地」と云われ，共に植物の自然発生的な成育を司どる作用として，天と地とが根源的に考えられている。それが完成するためには，その上に人が参加する。積極的に人の参加が求められる。天地の働きを補助し，天地の大徳を実現させるところのものとして，人の働きが不可欠の要素と考えられている。農耕に即して云えば「力田」[10]である。この力田にかかわり，それを支えている「術」[11]をもって人は天地の働きに参加するのである。この天・地・人を関連づけて考える時，古くより，中国人の思想の中に次のごとき考方のあることを指摘出来る。即

注(4) 宋応星著「天工開物」は，藪内清訳注にて東洋文庫中の一冊として刊行されている。同書解説が藪内清氏によってなされているが，「天工開物」の名称，内容，特徴，成立事情，刊行と影響，とくにわが国思想家への影響について参照のこと。益軒との関係については，同解説377頁参照。

(5) 古島敏雄著「日本農学史」第4章参照。

(6) 貝原益軒については，杉本勲著「日本実学史の研究」第2章，古島敏雄著「日本農学史」第4章を参照。

(7) 「農業全書」の，著述の目的については，「自序」「凡例」中の文章にこれをみることが出来る。

(8) 「開物」なる言葉は「易経」＝「周易繫辞上伝」に「子曰，夫易何為者也。夫易開物成務，冒天下之道。如斯而已者也。」（「子曰く，それ易は何する者ぞ。それ易は物を開き務めを成し，天下の道を冒う。かくのごときのみなるものなり。」――「そもそも易とは何のために作られたものであろうか。そもそも易とはあらゆる事物を開発しあらゆる事業を成就し，天下の道を蔽いつくす。易とはまさにこうしたものにほかならぬ」――）に書かれている言葉であって，開物とは「あらゆる事物を開発しあらゆる事業を成就」することを意味し，易そのものの本質を云っている。

＊『周易繫辞上伝』高田真治・後藤基巳訳「易経」岩波文庫版下巻，240頁，上の訳は高田，後藤訳による。

(9) 杉本勲著「日本実学史の研究」63頁。

(10) 「農業全書」21頁。

(11) 「農業全書」21頁に「力田の術」とあり，耕農の技術である。体験と「農書」によって知らされる。

ち，「易経」[12]の，天を象徴する乾卦の文に「彖曰，大哉乾元，万物資始」[13]（「大いなるかな乾元，万物資りて始む。——偉大るかな，乾元のはたらき！よろずの物はこれをもととして始められる」）[14]があり，地を象徴する坤卦の文に「彖曰，至哉坤元，万物資生。」[15]（「至れるかな坤元，万物資りて生す。——至大なるかな，坤元はのたらき！よろずの物はこれをもととして生みなされる」）[16]がある。「天の力によって万物が始まり，地の助けによって事実上にそれが生ずる」[17]「従って最も本源的な自然力は天に備わっていると理解される」「自然の中にみられる微妙さ」，それを「天工」とよぶことが出来る。天工に対して人工を並列しているが，「人工というものが，すぐれた自然力である天工を基礎にして成立するという」このような思想があった。さらに「天工というものが根本にあって，それに順応しながら利用価値をもった物をつくり出すところに人間の技術が存在すると理解された」これが宋応星の技術観であったと藪内氏は指摘している。「開物」とは天工に対する人工を意味している。

安貞は「農業全書自序」において，「我久しく民間にありて，農人の日々に勤むる所をはかり見るに，其術委しからずして，其法にたがふ事のみ多し。然るゆへに身を労し心を苦しめて勤めいとなむといへ共，效を得る事すくなくしてややもすれば秋のなりはひの不足を見ることしばしばなり。是土地のあしくして且勤めいとなみのたらざるにはあらず。唯ひとへに民皆農術をしらずして，稼穡の道明かならざるゆへなり。是れ誠に憐むべく惜むべき事の甚しきなり。」[18]と述べ，「致知と力行」[19]とをかくことの出来ぬ二条件とし，「先ずよく農術をしりて後農功を勤むべし」[20]として，農業技術の具体的叙述に入ったのである。いまこの小論で農業全書に展開される技術について述べる意図はなく，ここに農民のため，民生のため，農業生産技術の書たらんとする安貞の意図と，そのすぐれた成果が叙述され，その時以後多くの影響を与えつづけて来た事実を指摘するにとどめたい。この農業生産の限定を取り除き，広く産業に及ぼした時に「開物」，開物のための技術への方向が定められたと申して良いと思われる。

本論の主内容である佐藤信渕の「開物」思想をやや先取りして，上の内容と関連させてみると，信渕は「経済要録」の中で安貞および「農業全書」に言及している。[21]（例えば「経済要録」岩波文庫本，112頁以下，224頁以下等参照）。信渕の叙述をみると，「凡そ天地の物を生ずるは，各其物に従て適宜

注(12)「易経」は高田真治，後藤基已訳になる「易経」（岩波文庫版，上・下2冊分）より引用する。
(13)「易経」（岩波文庫）上81頁。
(14)「易経」（岩波文庫）上82頁。
(15)「易経」（岩波文庫）上91頁。
(16)「易経」（岩波文庫）上91頁。
(17) 以下の「天工」「人工」についての叙述は，藪内清訳「天工開物」の解説によっている。引用はすべて東洋文庫版，363頁以下を参照。
(18)「農業全書」（岩波文庫）22頁。
(19) 同上 22頁。
(20) 同上 22頁。
(21) 佐藤信渕が宮崎安貞，貝原益軒について言及している個所は所々に散見しうるが，「経済要録」の中では農業技術のための指導書として宮崎安貞の「農業全書」の価値を高く評価し，本論において後に言及するが，また若干の批判を加えている。

なる気候と相応ずべきの土性ありて，強ることの為らざる者なり。然りと雖共，人は一箇小天地なるが故に，人心の霊智を以て深考遠謀り，変通転換の妙術を施行ときは，不レ可レ生の土地に不レ可レ生の物品を生ぜしめ，不レ可レ熟の時に不レ可レ熟の物品を熟せしむべし，是此を造化の妙用と云ふ。是故に開物に従事する者は，先ず此等の神理を精究するにあらざれば，耕農の業を勤行と雖も，従来に一倍するの国益を興すことを得べからず。[22]」と。

2.

わが国近世「経世論」が時代の推移に即して展開する時に，「生産」＝「開物」の思想を各思想家がどのように位置づけ，理解していたかを，本論の主題を理解する上に必要と思われる範囲で，以下若干の検討を加えてみたい。

まず近世中期に至る思想家の中で，熊沢蕃山（元和5年・1619—元禄4年・1691）を逸することは出来ない。中沢護人・森数男両氏はその著書「日本の開明思想」[23]において，わが国の開明思想・開物思想の源流を，熊沢蕃山にもとめ，時・所・位に応じて政治・経済・民生の理論，とくに「民生」「利用厚生」の実学的側面に注目している。[24]蕃山は「時所位の至善を分別する学者日用の工夫が道徳論であって，これを和書にまとめ，より現実的な経世治教のことにわたる論を外書にまとめたとする」。[25]「集義和書」（寛文12年・1672），「集義外書」（宝永6年・1709）の二書と「大学或問」（「21ヶ条の封事」貞享4年・1687）の随所に「利用厚生」「民生」「富」が言及されている。大学或問[26]において蕃山は人君の天職を論じ「仁心」と共に「仁政」を行うことを天職とし，仁政とは「富有」である[27]と具体的に把握し，著名な大富有論を展開した。庶人困窮の根因を探り，それを解決するための議論を展開したが，その理論の根底に，生産，とくに，米の増産，開物への施策を持つ，すなわち蕃山のいう「すたる米」をすたらせぬ具体策を述べる。[28]すたる米をすたらせぬ様にする処置として，川堤の普請のこと，旱天の備として池・水を治めること，木棉耕作をやめ米を作ること，酒をつくらぬこと，たばこ作，南蛮菓子の禁止，海洋渡航における難破の防止等をあげている。同時に蕃山は

注(22) 佐藤信渕「経済要録」（岩波文庫版）112頁。

(23) 中沢護人，森数男著「日本の開明思想」（紀伊国屋新書版）は日本の「近代化の原動力として決定的な割役を演じた」ものを「開明思想」であったとの見解のもとで，日本の開明思想の源流をたずね，熊沢蕃山，富永仲基及び懐徳堂の人々を検討し，さらに中国および朝鮮半島で発達した開明思想を検討し，わが国の思想との関連を考え，本格的な開明家として本多利明，佐藤信渕を取扱っている。開明思想を考える場合，実学思想，開物思想に焦点をあわせている。今回の拙論を書くにあたり，多くの示唆を与えられた。

(24) 「日本の開明思想」26頁。

(25) 「日本思想大系」中の「熊沢蕃山」集，後藤陽一「解説」519頁。

(26) 熊沢蕃山「大学或問」（「日本思想大系」中の「熊沢蕃山」集）411頁，熊沢蕃山の経世論に関し若干の研究を発表したことがある。「近世前期経世済民論の一考察—蕃山の所論を中心として—」（『社会経済史学』第32巻第3号）。

(27) 「大学或問」大系本 415頁。

(28) 「大学或問」大系本 418頁以下に述べられている。

「今の勢[29]」に注目し，米一銭一物価の関係，交換手段としての貨幣の存在，商品・貨幣経済の発展，貨幣経済におおわれている社会経済構造を「今の勢」＝当世のなりゆきと認識し，これを停止するための蕃山のいう「米づかいの経済[30]」の主張をした。蕃山は「集義和書」巻第七「始物解[31]」において「周易繫辞下伝二章[32]」の器物の起源を記した文章を解説しているが，包犧(伏)氏・神農氏・黄帝・堯・舜氏と時をおうて，生産・開物が創始され発展して行く事情を述べている。伏犧は聖人の始であり，「始テ八卦ヲ作リタマフ」「此八卦，文字，経書ノ始ナリ。……コヽニヲイテ，天地万物ノ理コトゴトク備レリ[33]」，糸・縄・網をつくり，鳥獣・魚をとることを教えたこと。神農は農耕の術を教えたこと，「耒耨(らいどう)の利」，天下の人々に農業生産の技術を教えたこと，「天施シ地生ズ，与レ時偕ニ行ハルトイヘリ。天・地・人ナラビ益アルモノハ耕作ノ業ナリ。故ニ民ハ国ノ本ナリト云。[34]」蕃山は「財用」について説明し「財用ト云ハ，金銀銭等ノ事ニハアラズ。金銀多キハ，却テ天下困窮スルモノナリ。真ノ財用ト云ハ，五穀ノ多ト薪・材木・麻・綿等，民生日用ノ物ヲ云フナリ。[35]」と蕃山の主張を明白に述べている。さらに神農において，「市」「交易」の成立が，そして，農業を事とする者，鍬鎌を造る者，商人間の分業論が述べられている。[36]黄帝・堯・舜氏に至り，時・処・位に応じた徳治が行われ，[37]「舟楫の利」「牛馬の利」（「舟車馬牛ノ利」），武備，「臼杵の利」「弧矢の利」「宮室ノ利」「棺槨ノ利」（「臼杵・棺槨は，民をして生を養ひ死を送りて憾なからしむる所以なり」），始物解の末文には，後世聖人が「文字ヲ作テ善悪邪正ヲ明ニシ，符節ヲ作テ真偽ヲタヾシタマヒシ[38]」がために小人の邪曲がかくれ，政治が行なわれたことを述べている。蕃山の経済論の根底に，民生，利用厚生があり，開物についての主張が存在し，実学的主張をそこにみることが出来ることに注目したい。

3.

わが国近世経世家の中で，極めて明白な形で「食貨」を論じたのは太宰春台（延宝8年・1680—延享

注(29) 「大学或問」417頁，勢とは「当世のなりゆき」であるが，わたくしは商品貨幣の発展を内容とする社会経済構造と考えている。

(30) 「大学或問」418頁以下に。その主張が展開されている。

(31) 熊沢蕃山「集義和書」（日本思想大系「熊沢蕃山」111頁—133頁。

(32) 「周易繫辞下伝二章」岩波文庫版「易経」下巻 254頁—255頁に易の原文があり，蕃山の「始物解」はこの原文をあげ，それを解説したものである。内容は中国古代聖王により，易をはじめとして諸物が制定されて行った事情を説明したものである。

(33) 「集義和書」111頁。

(34) 「同上」112頁。

(35) 「集義和書」115頁，蕃山の「財用」についての考方はきわめて根本的な考方であって，後に活躍する多くの思想家の発言の中に同一の趣旨のものを多く見出すことが出来る。これは儒教教典よりの影響である。信渕の場合において，これとほゞ同趣旨の考方があることに注意したい。

(36) 「集義和書」116—117頁。

(37) 以下の諸々の利は民生，利用厚生のために制定したところのものである。「集義和書」117—132頁。

(38) 「集義和書」132頁。

4年・1747）である。「食貨」とは春台の「経済録」[39]（享保14年・1729）には「上天子ヨリ下庶民迄，天下ノ人ノ治生ノ道ヲ云也[40]」とあり，「食」とは「人ノ喰物，米穀ノ類ヲ指テ言フ[41]」「貨」は「貨財也宝貨也タカラト訓ズ，貨ニハ種々ノ物アリ，……略……人ノ生涯ヲ助ル故ニ都テ是ヲ貨物トイフ，又貨幣トイフハ銭也，銭ニ三品アリ，金・銀・銅也。[42]」とあり，「民生」「利用厚生」「治生」の道を論ずるものである。春台においても周易「天地之大徳曰レ生[43]」を引用シ，「天地ハ万物ヲ生ズルノミノ徳也，既ニ物ヲ生ジテ，又是ヲ養フ道アリ，天地ノ道ニサヘ不レ違バ，凡生アル物ノ養ハレズシテ死スルトイフコトハ無キナリ。[44]」治生の道に心を用うれば，貨物に不足せず人々は安穏に生活出来る。これが「天地ノ大徳[45]」であり，「利用厚生[46]」とは此事を云うのである。天地の大徳と人の働きについては次のごとく述べている。「土ハ必ズ物ヲ生ズル者也。……是天地ノ人ヲ養フ所也。然ドモ天地ハ言ハズ，人ノ手ヲ執テ教フルコトモナシ，五土ノ土，皆人民ノ利トナり，国ノ宝トナル道アレドモ，智者ニ非ザレバ是ヲ知ラズ，英雄ニ非レバ是ヲ行フコト能ハズ。[47]」天と地と人との関係が述べられ，さらに「地力ヲ尽ストハ土ヨリ出ル程ノ利ヲ遺サズ取尽ストイフ義[48]」であって，地力を尽すという道を立て，行うことによって，国を富ますことが出来る。すなわち「土地ニアル程ノ利，遺ラズ出デ，而モ之ヲ用テ尽ルコトモナシ，是ヲ無尽蔵ト云フ[49]」「其処ノ無尽蔵ヲ考テ，其無尽蔵ノ物ヲ取出シ，其上ニテ他所ト交易シテ，有ル物ヲ無キ物ニ換レバ，何ニテモ用度ノ乏シキコトハナシ。如レ此ニ土地ヲ治ムルヲ，地力ヲ尽ストイヒ，地ニ遺利ナシトイフ[50]」。この地力を尽すこと，そこに農耕の技術が求められ，それによって地に遺利がなく，かくて国が富有となる。この国を富すことが本であり，「国富メバ兵ヲ強クスルコトモ易シ。因テ是ヲ富国強兵ノ道トイフ[51]」と。また金の産出を述べる個所にて春台は，「民用ニ利アル物ヲ，空ク土中ニ隠シ置コト，惜キコトニ非ズヤ，是ニ術アリトイフハ術ハ道也，天地ハ万物ヲ生ジテ，人ヲ養フ者也，神ハ聡明正直ナル者也，人ヨク礼ヲ以テ神ヲ敬ヘバ，神必人ニ福ヲ与フ，若無礼ヲ以テ神ニ近ヅケバ必祟ヲ受ル也[52]」と述べて，其神を祭て其物を乞う必要があり，人が無礼を以て非道に其宝を奪んとする時は神罰をうける

注(39) 太宰春台「経済録」は日本思想大系「徂徠学派」集に収録されているが校注者の意図で，序，凡例，巻之一，及び巻之十のみが選択され，第五巻「食貨」は除かれている。ここでの引用は「日本経済大典」第9巻「経済録」を利用した。

(40) 「経済録」（日本経済大典）第9巻487頁。

(41) 同上 487頁。

(42) 同上 487頁。

(43) 「周易繫辞下伝」，「易経」下，岩波文庫本251頁。

(44) 「経済録」 488頁。

(45) 同上 488頁。

(46) 同上 488頁。

(47) 同上 493頁。

(48) 同上 493頁。

(49) 同上 495頁。

(50) 同上 495頁。

(51) 同上 490頁。

(52) 同上 531頁。

ものであるともいう。

春台には「経済録」中の第五巻食貨と第九巻制度にもれた事柄について補足した文に「経済録拾遺」[53]がある。これは経済録に記されている食貨の内容に転換を与え，いわゆる重商主義的価値観，あるいは藩専売制度主張への一大転換をなした書物として注目されるところのものである。[54]春台の政治論に具体性と実用性があり，当時の人々に歓迎された点を最も良く示しているものであるが，春台は当時の社会経済の実情を把握し，支配者が「国用不足シテ貧困スルコト甚シ」[55]とし，御借上，莫大なる借金，国民を暴斂する有様で，如何にも救いがたい状態を認識し，これに対して解決する道を具体的に述べている。国家に制度を立てるのが根本ではあるが，今は病の急なるところをみて，是を救う方策を考えるべきであるとして，今の世はただ金銀の世界であり，金銀にて万事の用を足すことが出来るから，如何にもして金銀を獲得せんと努力せねばならない。金銀を手に入れる術は「買売」[56]が一番近道であるという認識の下に，春台は国ヲ富ス術＝富国策を述べるのである。すなわち「此等ノ経済ニ倣テ，計策ヲ用ヒバ，大小ノ諸侯ノ国ニ，何トイフコトナク，土産ナキハ有ラズ。土産ノ出ルニ多キ有リ，寡キ有リ。土産寡キ処ハ，其民ヲ教導シ，督責（トクセキ）（タヾシセム）シテ，土地ノ宜キニ随テ，百穀ノ外，木ニテモ草ニテモ，用ニ立ツベキ物ヲ種（ウヘ）テ，土地ノ多ク出ル様ニスベシ。又国民ニ宜キ細工ヲ教テ，農業ノ暇ニ，何ニテモ人間（じんかん）ノ用ニ立ベキ物ヲ作リ出サシメテ，他国ト交易（シロモノガヘ）シテ，国用ヲ足スベシ。是国ヲ富ス術ナリ。」[57]と。富国の第一，根本は藩内に開物を行い，貨物の生産を豊富にするための諸指導をなし，多くの土産を獲得し，しかる後に土産を藩外に送り「交易」を行うのが，金銀を獲得する道であると主張している。この貨物を交易するにあたりて，藩内の貨物を収集し，それを売却する主体として，市賈にかわるに藩が主体的に行動する事を主張し，いわゆる「藩専売制」である。そして春台は「金銀ヲ豊饒ニスル術ハ，市賈ヨリ近キコト無シ。……諸侯其国ノ土産ヲ以テ，他所ニ市賈センニ，何ノ憚ル所アランヤ。」[53]といわゆる重商主義的見解を述べたのである。すでに引用した文より判断出来るごとく，交易の根底に，具体的に生産を増強し，開物の業を拡大することが前提されている。春台は具体的な開業の技術・仕方そのものについての叙述をかいているが，春台の意図が開物・産業の発展におかれていた点に注目したいと考えている。

注(53) 太宰春台「経済録拾遺」日本思想大系「徂徠学派」集に収録されている。（日本経済大典第9巻にも所収）前半は「食貨」の補足として述べられたところのもので春台のきわめて現実的な施策への抱負をみることが出来る。

(54) 日本思想大系「徂徠学派」集中の尾藤正英氏の解説を参照のこと。

(55) 「経済録拾遺」日本思想大系「徂徠学派」45頁。

(56) 同上 47頁。

(57) 同上 48頁。春台による開物論の積極的な主張である。その上で交易論が展開しているところに注目したい。

(58) 同上 52頁。

4.

わたくしは林子平（元文3年・1736—寛政5年・1793）の富国策を検討したことがある。[59] 林子平や次に検討を加えんとする本多利明（延享元年・1744—文政4年・1821），ややおくれて活躍した本論文の主題である佐藤信渕（明和6年・1769—嘉永3年・1850）等が活躍した18世紀後半より19世紀前半にかけての時代を，前述した安貞，蕃山，春台等の活躍した元禄享保期と比するとき，そこにいちじるしい相違点を見出すことが出来る。決定的な相異点と考えられるものは，日本をとりまく国際環境にみる大きな変化である。海外よりせまり来るロシヤ及び西欧列強の外寇の危険が身近かにせまりつつあるとする脅威の観念であり，それに対する防禦の必要，防備を完全ならしめるための国力の充実が，切実な問題として識者に意識されるに至ったことである。この海外事情と共に，目を国内事情に向けた時，幕藩体制の構造的危機が前時代に比してまことに深刻となり，それはあらゆる面で露呈していた。幕府諸侯武士層の財政窮迫，農民の困窮，天災，饑饉，間引，荒田畑にみられる農村の破壊，農民闘争の激化，産業の発展，商人資本の旺盛なる活動，新しい学問としての蘭学の発展と普及，科学的・合理的・経験的思想のめざましい発展等が指摘される。子平，利明，信渕等の思想を検討する場合，農村の荒廃，農民の困窮，商人資本の活動，政治の腐敗が意識にのぼり構成されて行ったのであるが，外寇の危機が常に念頭にあったことを忘れてはならない。林子平は仙台藩の藩情を背景として，富国強兵の理論を展開したが，それは子平が仙台侯に捧げた「第一上書」（明和2年，富国建議），「第二上書」（天明元年）「第三上書」（天明5年，貨殖存寄書），「富国策」，主著「海国兵談」（天明6年）[60] 等で述べられている。海国兵談には経済の大略，国家を経済するの要として9項目[61]をあげ，第一の「食貨」を経済の第1項目にあげ，第8の「地理」において気候風土に即した国産を産出する必要のあることを提言している。第二上書において子平は「開国産」さらに「楮幣の制」の二方策が相補完しあって充実する時，「富国」への道[62]が開らかれるというのである。子平は上書において，「致富＝富国」の具体的な時務策を開陳している。人の世に四難（餓饉・水難・火難・病難）[63]，これに軍旅を加えて五難があるが，これに対する備のために「金穀」を十分貯えることが必要であるという。第一は穀，広く国産の奨励である。第二は金銀の蓄積のための施策

注(59) 「江戸時代経世済民論の一考察—林子平の「富国」策を中心として—」（「三田学会雑誌」54巻6号）。
本論文は近世経世家が「富」について如何なる考方を持っていたかの「富観」を検討し，その富の観念の相異によりて富国策が異って来る点を，水戸学派の経世家の思想を念頭におきつつ，林子平の富国策を検討したものである。一藩重商主義的思想を有していたとされる子平が国産の開発＝開物に注目している点にふれている。

(60) 林子平の「第一上書」「書二上書」「第三上書」「富国策」「海国兵語」等の献言及び著書は「林子平全集」第一，第二巻に所収。本全書は昭和18年，及び昭和19年に，生活社より出版されている。

(61) 「海国兵語」（林子平全集）第一巻 384頁。

(62) 「第二上書」（林子平全集）第二巻 499～500頁。

(63) 「海国兵語」（林子平全集）第一巻 359頁。

である。この二つの政策が「国を富ます御政事」[64]である。第一の国産の奨励には，「地利を尽す」[65]ことを求め，それを十分にするためには「術」が必要となる。かくて自国藩内で土産を取立て，開物の業を進めることを主張する。今具体的にそれを述べる余裕はないが，漆，桑，楮の三木をはじめ農産物・水産物・手工芸品等多くの国産品をあげて注意すべき要項を述べていて，開物の説明である。ここで注意すべき点は，子平は米穀の生産には良田・良夫の力が向けらるべきであって，其他の産出には捨て地を利用し，婦女子の労力によって行わるべきであり[66]，細工物も「士凡諸陪臣町人宿守之隠居婦女等」[67]にて製造さるべきであるとの指摘である。このように貨殖は国内において土産を取立てること，国産を盛にすることを根本とするものであるが，これだけでは未だ不十分であり，その土産を他国に送りて金銀を獲得することにより，富国が完成すると主張する。この他国へ移出し取引し金銀を獲得する具体策として，藩内に流通する「楮幣」＝藩札を発行し，それにて土産を集荷し，それを移出することが必要である。この「開国産」と「楮幣の制」との二政策により，国は富み，それにより学校を興し，文武両全の人材を教育し，武備を完備してはじめて，仙台藩は日本無双の文武国となることが出来るという。

5.

さて，目を本多利明に転じよう。利明については，日本思想大系「本多利明・海保青陵」集中に塚谷晃弘氏は「経世秘策」「西域物語」「交易論」「西薇事情」「長器論」を正確に復刻され，同時に綿密なる頭注，補注を本文に加えられ，さらに「江戸後期における経世家の二つの型—本多利明と海保青陵の場合—」及び「本多利明」の二論文で解説をこころみられている。利明研究のため基礎的な資料の復刻と，すぐれた解説に注目すべきである。また別の視角からであるが，前掲の中沢護人，森数男共著「日本の開明思想」は本多利明を日本のすぐれた開明思想家・開物思想家として評価し多くの頁をさいている。わたくしはこれまで若干の思想家の経世論の骨組を検討し，その理論の根底に，生産—開物の思想が存在していることを述べてきたのであるが，ここでは上の検討にそうて利明の経世論を考えてみたいと思う。わたくしは「本多利明の農政論」[68]を検討したことがある。そこでは，利明の全思想体系解明の端緒として，利明がその時代の農業生産—農村—農民事情を客観的に洞察し，貧困—悪の発生の根源をつきとめ，そこから貧困—悪の問題を解決し，庶民を救済せんとして諸政策を述べた事を検討した。利明の諸政策が主として農政の面から把握され，そこか

注(64) 「第二上書」（林子平全集）第二巻　504頁。
(65) 「富国建議」（林子平全集）第二巻　444頁。
(66) 「貨殖存寄書」（林子平全集）第二巻　535頁。
(67) 同上，548頁。
(68) 「本多利明の農政論—その前提—」（「三田学会雑誌」第51号第5号），「本多利明の農政論（続）—その経済政策の性格—」（「三田学会雑誌」第51巻第10号）。

ら，利明特有の人口理論との関連より，交易，海外発展論が展開されていることを述べている。利明の思想形成と特質については別稿にも若干述べたが，彼の思想は四書五経的・封建道学的な学問より離れて，算学・天文・暦学・地理・測量，及び各種の産業技術（例えば航海術・冶金術など）を学びとり，西欧の近代的・科学的精神に影響をうけ，その結果，合理的・科学的精神に貫かれていた。利明には「経世秘策」[69]なる注目すべき書がある。この書は「国家豊饒策」の別名もあり，国を経営し，富有ならしめるための秘訣とする諸政策を論じたものである。まず利明は農村の破壊，農民の困窮，悪の存在の実情を，利明特有の人口理論をふまえて洞察し，「万民追ヒレ日ヲ追レ月レ，増殖の勢ひを為すは，至極其筈のこと也。是に従ひ国産も亦追レ日追レ月増殖せざれば，天下の国用不足する故，日本国中の曠野及空山迄も，土地の限りは皆開発し，田畑となりて，農業耕作して百穀百菓出産せざればならず。若是が不足せば，万民の国用不足となりて，凶歳饑饉に当りて饑渇の庶民出来する也。其内農民多く饑死する故，国産不足になりて，世の中静謐ならず。」[70]という。これに対して，「追レ日追レ月増殖する四民の勢ひを折かぬ様にと慮らずんばならず」[71]，人口が時の経過とともに急激に増加するこの勢ひを阻止しないで平安に生活出来るためには，「四大急務を以，国政の最第一として治む」[72]べきである。かくすれば人口が増加するので良田畠の荒廃もなく，良田畠が開田され，国家豊饒となると考えている。また利明は「通用金銀の際限を建ることは肝要なり」[73]とつけ加えている。四大急務[74]とは第一焔硝，第二諸金，第三船舶，すべて開業の大業であり，「開物」の事業である。第四属島の開業は海外における国土の開業の実施と交易である。いまこれらについての詳細な説明は省略するが，結果として「一国一郡を治め，天下を治るも，此四大急務を用て治るときは，日本の曠野空山迄も，土地の限りは田畑となりて居村出来，其勢ひ盛んに行はれ，終に島々までも漸々独開して，金銀銅山も独開し，百穀百菓も追レ年増殖して，天下の国用に不足することなし。」[75]富国の実現である。この国家富饒策は利明の云う「自然治道」[76]（永世不動の大治，国富を増し，農民を撫育するための天意に則した経済政策である）である。自然治道の政治の範は西欧列強にある。さらに利明は経世秘策後編において，「唯今の時勢より執入て他に背ことなく，天下国家に益ある仕方に勉るを名て，国務」[77]といい，国務に「大急務あり，小急務あり」[78]て，前者は四大急務であり，「いまだ製作を得ざる物数多ある内に」[79]急務なる物四品ありとして第一小急務4条をのべ，さらに第二小急務3

注(69) 本多利明「経世秘策」は日本思想大系「本多利明・海保青陵」集に塚谷晃弘氏校注にて収録されている。
(70) 本多利明「経世秘策」巻上，日本思想大系「本多利明・海保青陵」集12頁。
(71) 同上，13頁。
(72) 同上，13頁。
(73) 同上，13頁。
(74) 同上，14頁。
(75) 本多利明「経世秘策」巻下，大系22頁。
(76) 同上 22頁，塚谷氏による校注，および補注に「自然治道」に関するすぐれた説明がある。参照。
(77) 本多利明「経世秘策」後篇，大系 59頁。
(78) 同上，59頁。
(79) 同上，60頁。すべてここで論じられている項目は産業開発—開物である。

条，第三小急務3条をのべ，金銀の精製，焔硝の製造，家根瓦を鉄製にすること，玻璃障子を製作することの開物を，淀川，阿部熊川，千曲川の河川整理，治水を，児島湾，鎧潟，大潟，田潟，猫苗代の整理，新田開発等の開物を具体的につけ加えて述べている。すべてこれらは生産，産業の開発，開物の政策であり，これが富国の基礎におかれていることに注意したい。

さて特有の人口理論[80]によれば，以上のごとき開物によるも，利明は「産業不足するの道理也」といい，「自国の力を以，自国の養育をせんとすれば常に不レ足，強てせんとすれば国民疲れて，廃業の国民出来して大業を破るに至る[82]。」と認識するに至り，次のごとく云う。「爰を以，他国の力を容れずしては，何一つ成就する事なし。他国の力を容んは，海洋を渉渡せざれば，他国へ至る事難し，海洋を渉渡するは，天文・地理・渉渡の法に暗くては，海洋を渉渡する事ならず。故に西域の風俗人情の事を具具も述たる也[83]」と。同一の趣旨を「只其国より産る所の物を用て，其国を養んとすれば常に足らず。強てせんとすれば，必ず国民疲れて成就せず。於テレ是ニ他の力を入れずしては，大業の成就する事は決てなし。此境を，開祖たる人能諦悟し，万国の力を抜取て我国へ入れざれば，此大業が決て成就せずと見究め，扨万国の力を抜取には，交易を用て抜取の外なし[84]。」国内の生産・開業の限界は，人口理論により，海外渉渡，交易，属島の開業へと展開する。海外渉渡，交易，属島の開業について利明は具体的に詳細な理論を述べているが，現実の日本（支那と共に）は「国家を末増に豊饒になし，永久其末を遂て，遂々国力を厚くするの真法を，民に教へ，万国へ渡海交易させ，他国の国力を抜取て，我国へ入の密策[85]」を実行するに至っていないのである。

利明は国家豊饒の秘策を検討した時，西欧の科学，産業技術，諸制度，合理思想を土台として，「農業は国の本」として，農業生産の増進と，それよりはるかに広範囲の産業開発＝開業の業＝開物の主張を試みたのであるが，人口理論と関連し，国内生産に限界のあるところから，「重商主義」的特色を持つと称せられる利明の交易論—貿易と属島開業の政策の主張となってあらわれたのである。交易—貿易・属島の開業等のいわゆる「重商主義」的主張には単なる海外との取引，金銀の獲得に限るのではなく，属島の開業等の開物を重視し，単なる貿易中心主義でないことに注目したいのである。

6.

幕末期水戸藩において成立した水戸学乃至水戸学派と称せられる諸学者の思想を検討してみよ

注(80) 本多利明の人口理論についてはここではふれない。
(81) 多利明「西域物語」下　大系 147頁。
(82) 同上，147頁。
(83) 同上，147頁。
(84) 同上，159頁—160頁。
(85) 本多利明「交易論」　大系 167頁。

う。[86] 水戸学派の諸思想家も前述の18世紀後半以来19世紀前半の国内外の社会・経済・政治状況下の諸問題とくに内憂—貧困，外患—海外より侵略の脅威に対応して経世論を展開した諸思想家と同一の課題を負っていた。水戸藩のおかれていた藩情（政治・社会・経済の歴史的諸条件，とくに思想状況）により農本主義的色彩を色濃く持つに至ったところに特色がある。まず水戸学派の代表的思想家である藤田幽谷（安永3年・1774—文政9年・1826）を検討しよう。幽谷は「安民論」[87]において人君の政治の要諦を「安民」に求めた。安民とは「人民を養うことであり」，民に衣食住をゆたかに与え，後より人民を教え導く，「庶・富・教」の原則にのっとった仁政[88]である。また「正徳・利用・厚生」を言う。ここに示された根本思想は「丁巳封事」[89]「丁卯封事」[90]などの封事と主著「勧農或問」[91]にて展開されている。幽谷は眼前の水戸藩の時弊をみ，とくに農業生産・農村の荒廃，農民の悲惨なるうれうべき状態に対して，いかに復興し，農民を救済し，民生を安定するかの農政革新乃至藩政建直しを献策した。幽谷は根本思想である儒学的仁政思想である「庶富教」[92]を述べ，「如何なる政ありてか庶ありて且富み国用不足なく上下安泰たるべきや」[93]との問を発し，水戸藩の時弊に即して「勧農」の政の必要なることを論じた。古来，「土地・人民・政事」を三宝とし，三宝を宝として勧農の政を行う。[94] 勧農の術が万全であるならば遊惰の民を尽く耕作に駆りたてることが出来る。そのためには「これを利し是を貴ぶに在る而已，これを利し貴ぶときは民の農にすゝむ事水の卑きに流れ獸の壙きに走るが如きこと疑なかるべし」[95]と。しかし現実においては「農を貴ばず農に利せざるのみに非ず五の大弊ありて日日月月に其病深く成ども是を止ることなし嘆すべき事なり」[96]とし，この五大弊を取り除かぬならば農業を復興することは不可能であるという。五大弊[97]とそれを廃止する政策について詳細に論ずることは省略するが，「富国の本務は勧農に在て勧農の政先づ五弊を除くにある」[98]といい，この具体策の実施を「明君賢相」に求めている。また幽谷は「利用・厚生・正徳」に示される聖人の仁政の原則をもって，非実学的な水戸藩の政治を批判し，政治は「国は富み，兵は強く，民は信ず」を根本に実施さるべく，幽谷は兵を強くするために国を富ますことを第一にす

注(86) 「近世農政思想の一考察—幽谷の場合—」（「三田学会雑誌」第52巻第5号）「近世農政思想の一考察—幽谷を継承した人々—」（「三田学会雑誌」第52巻第11号）拙論でわたくしは藤田幽谷，会沢正，藤田東湖の経世論を水戸藩情を背景として検討した。

(87) 藤田幽谷「安民論」は菊池謙二郎編「幽谷全集」（昭和10年）に所収されている。

(88) 同上，全集，226頁。

(89) 藤田幽谷「第一封事」寛政9年（1797）である。

(90) 藤田幽谷「第二封事」文化4年（1807）

(91) 藤田幽谷「勧農或問」寛政10年（1799）以下の引用は菊池編「幽谷全集」による。

(92) 同上，123頁。

(93) 同上，123頁。

(94) 同上，125頁。

(95) 同上，130頁。

(96) 同上，130頁。

(97) 五大弊とは侈惰の弊，兼併の弊，力役の弊，横斂の弊，煩擾の弊，をいう，前掲論文参照。

(98) 「勧農或問」全集，167頁。

べきことをいい，国を富すこと＝「富国」の根本は，前述の「勧農」にあり，民を愛護することによって国が富む，この富国こそが強兵の基である。幽谷の富国論が農本主義によって貫らぬかれている点は，「国産」一広く開物一への見解によって知ることが出来る。すなはち，国産奨励に藩が巨額の金を支出している現状をみて，「一体御国の品を用ると申事道理は宜候へ共肝要之所は不行届是世話をやき候事を見聞仕候に皆々末業之利を事とし候者を助け候致方にて真実国の利には不罷成候」[99]といい，国産奨励・開物のための支出は，末業の利を事とする工商の輩を助ける結果となり，本業＝農を粗末にし，真実に国の利とはならいと言っている。農を本とし，農こそ富の源泉であると考え，経世論が構成されたのである。

幽谷よりやや後に活躍した会沢正（正志・正志斎）（天明2年・1782—文久3年・1855）は藤田東湖（文化3年・1806—安政2年・1855）と共に，後期水戸学を代表する思想家であって，師藤田幽谷の思想を継承・発展させた偉材である。正志斉は幽谷と同様に実学を唱導し，攘夷論との関連で政治の核心を民政の実施，民生経済の安定におき，「利用・厚生・正徳」を政治の三大要素として重視し，それの実行につとめた。時弊を痛論し，具体的な施策を論じたものが主著「新論」[100]である。いま新論に展開されている正志斉の経世論を詳述する意図は無く，経世論の骨組について若干考察を加えたいと思う。新論はまず対外危機の深刻化の認識，当時の国際情勢の認識一形勢・膚情として説明されている一を述べ，外患＝外寇を論じ，国内に目を転じ，内憂を述べる。そして国内悪弊の認識とその排除策に論及している。二大悪弊は「曰く時勢の変なり。邪説の害なり。」[101]である。この両者がわが国の理想的政治秩序を混乱させ，国内不安と窮乏の根因をなしている。この悪弊を断たんことを願い，「武士土着」の必要を論じ，富・生産・消費・貨幣・物資等を論じ，富の実権が商人の手に移行し，生産に従事する人口の激減，不生産者，消費者の激増の事実を指摘し，ここより五穀の生産する「農」のみを，農の中「米作」のみを生産的と考え，他を不生産的なものとみなし，民が米を生産し，士民がそれを支配出来る措置と制度（米価の問題を考えている）とを確立することが出来れば民の生活が安定し，国は安らかになると考えたのである。強兵のための富国の根本は「農」にあったが，正志斉は国防の必要上，巨銃巨艦の建造を主張し，そのため，鉛，錫，銅，鉄，硫黄の類を諸国より産出する＝開物を勧め，そのため「山嶽の秘」を発して鉱山業を開発し，其他国内産業の開発を重視，強調している。[102]しかし，あくまでも中心は農業一水田稲作にあり，富国の基礎を民生の安定においている。正志斉は諸産業の開発について次のごとく結論している。「故に水土の産，人工の作，米穀の儲は，其の靡を息め，其の生を広くし，害あるものは之を除き，利あるものは之を興し，深く謀り，遠く慮り，時を相て弛張し，之が権衡を設け，之が制度を立つる

注(99)「丁卯封事」全集，597頁。
(100) 会沢正「新論」は岩波文庫版による。引用文は塚本氏の訳文による。
(101) 同上，文庫本 31頁。
(102) 同上，文庫本 181頁。

は，特にその人を待ちて而る後に行はんとす。[103]」と。かくのごとく，正志斉は外患と内憂とを結合し，国を守るために国内改革を実施し，富国強兵の実をあげんとして経世論を展開した。この必須の条件として国富の増大が論ぜられ，その中心は農業—米作にあるが，同時に国内産業の開発—開物への目が開らかれはじめているところに注目すべく，師幽谷と比した時に，時勢の推移をそこにみることが出来，やがて水戸藩が行った開物への思想的前提が形成されつつあったのである。

7.

佐藤信渕（明和6年・1769—嘉永3年・1850）は「経済要録[104]」序言（「天柱記[105]」序言，「経済要略[106]」序言等においてしばしば述べているが，その内容は大同小異である）において，佐藤五代の家学＝経済之学の成立について以下のごとく言及している。まず祖父不昧軒が「饑饉屢行れて万民流散し，餓殍する者の甚多[107]」きをみて，医業を捨て，経済之学に志し，「先農政を精し，物産を開き，百工を興し，其製造を巧にすべきの諸法を明にせんことを欲し[108]」て，農耕をはじめ多くの産業の「数理」を研究し，「開国新書」十二巻，「山相秘録」二巻を著したという。この開国新書は「経済の要旨，開物の蘊奥」を説いた書であり，佐藤家学＝経済之学の「基根[109]」であるとし，その要旨は「荒曠たる国土を新に開発して物産を採出し，境内を富貴せしむるの論[110]」であり，蝦夷地を開拓する策に似ているという。また「山相秘録」は各種鉱山の山相学に相当する内容である。

父，玄明窩もまた「経済開物」の学を修め，「開物究理」「経済講義」等随筆十三巻，「山相秘録図解」一巻，「坑場にて人夫を取扱へき法」二巻を著したという。「天柱記」序説には「開物要録」二十三巻，「製煉秘録」二十巻，「五金開発論」七巻等を著したとも述べているが，不思議にこれらの著述がすべて今日伝えられていないのである。また佐藤家の人々についての生涯，経歴についてもきわめて不明瞭で，佐藤家学の存在そのものに否定的要素がきわめて強く，あるいは信渕の創作による部分が多いと言わざるをえないものである。[111] さらに，信渕が自分自身を語る部分に関しても，きわめて不明確な部分が多く，その著作についても他人の著書の剽盗が多い事がすでに指摘されている。いまここでそれを問題とするのではなく，信渕が自己の経済学の基根をいずこに求めたかの，

注(103) 同上，文庫本187頁。
(104) 佐藤信渕「経済要録」は瀧本誠一校訂になる岩波文庫本による。(昭和3年発行)
(105) 「天柱記」は日本思想体系「安藤昌益・佐藤信渕」集収録による。
(106) 「経済要略」は日本思想体系本による。
(107) 「経済要録」文庫本4頁。
(108) 同上，文庫本4頁。
(109) 同上，文庫本4頁。
(110) 同上，文庫本4頁。
(111) 佐藤家学の存在，佐藤五代の人々の経歴や著作について今日まで多くの疑問が提出され，佐藤家学そのものの存在が疑われている。森銑三著「疑問の人佐藤信渕」参照。

信渕の意図を問わんとしているのである。

信渕は父が死に臨んだ時，「勉て経済開物の学」[112]を講究し，父祖の宿志を継ぎ，家学を成就せよといわれて，信渕自身「経済開物の学」を自得し，家学を継承し，経済学を樹立せんとする自意識を強く懐くに至ったことを，しかも佐藤家学＝経済之学の基根が「経済開物」にあることの主張にわたくしは注目したいのである。信渕の思想形成について不明の点が多いが，信渕はとくに平田篤胤の皇国古道の学を学び，天地創造，天地が万物を化育する理を悟り，家学を成就したことを強調している[113]。また前述の開国新書，開物要録を基礎とし，「鎔造化育論」三巻，「天柱記」三巻，「経済総録」八十巻を作り，草稿がすでに完成したとも述べている。前二者は天地創造，天地の万物を化育する理を示し，経済之学の土台においたが，それはまさに生産＝開物の原理を展開したものであった。すなわち信渕経済学は「国土を経営し，物産を開発し，土地をして遺利なからしむべき大意と，国家をして永久隆盛にして衰微すること無く，境内長なへに富饒にして，含霊(ひと)の大ひに蕃息すべき趣旨」[114]をもって，「経済要録」十五巻に結実したのである。それ故「経済要録」こそ信渕家学＝経済之学の特質・構造を明示した書物であるということが出来る。

信渕によれば，「経済」とは「国土を経緯し，蒼生を済救するの義」[115]であり，「国土を経営し，物産を開発し，部内を富豊にし，万民を済救するの謂」[116]である。人間の生活に不可欠の衣食住の物資を生産することが，人間の生命を保つ所以である。そのためには「能く境内の平原・曠野・山谷・河海・池沢・林藪等を経緯して，気候の寒暖を審にし，土性の剛柔を察し，気候に適ひ，土性に宜き所の諸品を作り，天地化育の勢力を尽して，土地に遺利なからしめ，士農工商共に其職を勤て，懈怠すること無く，奢侈すること無れば，財用充足て，国家富盛すること必せり」[117]と。財用充足りて，国家が富盛になるためには，第一に生産の増強，開物の業の奨励，第二に奢侈をいましめ消費節約の二面を強調しているが，このことは根本において伝統の富国・財用充足，安民の思想の継承に外ならないのである[118]。経済の目標は「国家富盛＝富饒」にあり，そのためには，気候・風土・等生産のための諸条件・天地間に存在する「理」を解明し，それを生産一開物の技術として利用し，「地力を尽さ」しめ，「天地化育の勢力を尽して，土地に遺利なからしめる」[119]ことが根本であり，それは実に農業生産，さらに諸産業の発展である。この富国論が信渕の経済学の「基根」であり，経済之学そのものでもある。ただここで注意すべきは，経済之学は「国家に主たる者」＝「一境の国土を領して，

注(112) 「経済要録」文庫本，6頁。
(113) 平田神学と信渕の思想との関連についての検討は，日本思想大系「安藤昌益・佐藤信渕」集の拙論「解説」＝「佐藤信渕——人物・思想ならびに研究史——」を参照せられたい。
(114) 「経済要録」文庫本8頁。
(115) 同上，文庫本 13頁。
(116) 「経済要略」大系本 522頁。
(117) 「経済要録」文庫本 13頁。
(118) 「財を生ずるに大道あり。これを生ずる者衆く，これを食する者寡く，これを為る者疾く，これを用れる者舒かまれば，財恒に足る。」（大学）これは生産が多く，消費が少なければ，財貨がつねに餘るという自明の理を述べたものであるが，これを根拠として生産増強と消費節約を主張し，経済論の基礎においた論者が多い。
(119) 「経済要録」文庫本 13頁。

此に君臨する人」＝「国君及び卿大夫等執政の貴官」が「天に代て下民を愛育すべき」[120]「天地の神意を奉行し，世界の蒼生を済救すべき」[121]大道であって，治者の安民の術であることである。万民を救うためには，国内を富贍にする必要があり，そのためには経済＝開物の要旨を修し実施せねばならない。とする治者への自覚の要請であるということである。

この経済＝開物を実行するにあたり，範とすべきは西洋のロシア，イギリス等の諸国であり[122]，北海道と同様な気候・風土にありながら，「経営の基根として，種々工夫を凝し，上下一致して国家の経済を勉強せしに因て，漸々国富み，兵強く為りて，今時にては，世界に名高き富盛国と為った」[123]二国である。この理を念頭に入れ，日本の有利な諸条件を生かし，「物産製煉の術」[124]を研究し，開物に努力して，わが国を開発し，海外を経略するならば「全世界の総主となるべき国」[125]となるという。かくて，信渕は経済之学の内容として「創業」「開物」「富国」（経済要録にてはこの三篇をとく）及び「垂統」（経済要略には四項目が完備する）の四篇を展開したのである。

国家富国策・経済＝開物の実行には，「もとで」が前提されねばならない。信渕はこのもとで＝資本の形成・蓄積を「創業」篇の主題として検討する。経済要録においては，もとでの形成と蓄積，それによる創業に関しては，伝来の議論を踏襲しており，とくに新しい意見を述べているわけではない。まず，信渕によれば，「創業」とは「開物の業を創むるを云ふ。所ゝ謂る開物とは，国土を経営し，物産を開発し，境内を富饒にして，人民を蕃息せしむる業なるを以て，即ち天地の神意を奉行する事なり。」[126]と。創業とは「国家ヲ富盛スルノ事業ヲ創ルヲ云フ」[127]のである。創業とは開物の業＝国家富盛の事業を創ることであって，信渕の経済之学＝開物が教えるところである。創業のにめの根本的条件を検討して信渕は，古の，大初の時にあっては，人々はきわめて素朴な生活をなし，奢侈がそこにはなかった。「質素なれば質素なる程，世は渡り易き者」[128]であったが，世が変り，時が移るにつれて，人々は「華美豪奢の魔道」[129]におち入り，世は渡りにくくなった。そこで，「倹素」こそが「天地の心を奉行する，大業の創めなることを知るべき」[130]である。その理由は「生民の一日も無くては叶はざるものは，食物，衣服，居宅なり。此三つの物備はらざれば，人民其性命を保持すること」[131]が出来ないのであるから，「経国の業を創めんとするには，先づ倹素を務て下民の

注(120) 「経済要録」文庫本
(121) 同上，文庫本 14頁。
(122) 同上，文庫本 17頁—18頁。
(123) 同上，文庫本 18頁。
(124) 同上，文庫本 18頁。
(125) 同上，文庫本 18頁。
(126) 同上，文庫本 20頁。
(127) 「経済要略」大系本 527頁。
(128) 「経済要録」文庫本 22頁。
(129) 同上，文庫本 22頁。
(130) 同上，文庫本 23頁。
(131) 同上，文庫本 23頁。

衣食住を全備し，而して後に物産を開き，交易を通じ，以て国家を富盛にすべし」[132]である。この場合，下民は自己の家業を勤めば衣食住は自然に備わるものであるが，上にある者が「逸楽を好むときは，下民皆遊惰の俗を為して，田畠悉く荒廃し，境内皆貧窮す」[133]るからである。上の費が多くなれば当然下に強く収奪を行わざるをえない。開業などとても出来るものではない。それ故に「其君少しく倹素なれば，其国少しく富盛し，大に倹素なれば大に富盛す。又奢侈の其国を衰微せしむるの理も亦同じきのみ。是以て奢侈は亡国の基にして，倹素は創業の原なることを知る」[134]と。別言すれば，創業＝国家富盛にする事業を創めることは「其国君ノ平日ノ行状ヨリ始マ」[135]るとし，その徳目として「恭倹ノ二徳」をあげ，「国君少シク恭倹ナレバ其国少シク富盛ヲ為シ，大ニ恭倹ナレバ，大ニ富盛ス」[136]である。そこで「其君の奢侈を警しめ，倹素を修めしめ」[137]るため，君をいさめる忠正なる士が求められる。

信渕は「開物」論を展開する。開物とは如何なる意味であるか。開物は易経「周易繫辞上伝」に「子曰，夫易何為者也。夫易開物成務，冒天下之道。如斯而已者也。」[138]の「開物成務」の言葉が源であるが，信渕は「所レ謂る開物とは，国土を経営し，物産を開発し，境内を富饒にして，人民を蕃息せしむるの業」[139]，あるいは「開物トハ百穀，百菓ヲ始トシテ，種々水陸ノ物産ヲ開発シテ境内ヲ豊饒ニスルヲ云フ。」[140]，あるいは「開物とは境内を審かに経緯し，気候を考へ，土性を察し，山谷・池沢を開発し，平原・曠野を新墾し，種々の貨物を出して，其製造を精妙にするを言ふ。」[141]と。「国家に主たる者」＝「国家を領する者は，必ず経済の学を修めて国土を経緯するの術を精密にし，天工開物の法を講明して政事を勉強せずんばあるべからず。」[142]と。ここに国家に主たる者の天職があるという。経済要録に於て，信渕は必ずしも「天工開物の法」を具体的に，詳細に述べることをせず，「土地の勢力を尽して物産を興し，且つ其製造を精くするの法」[143]についての概略を述べるにとどめている。

さて開物の内容であるところの品物はまことに多種類であるが，信渕はこれらを「土石・生植・活物の三種」[144]に大別し，各々の品物について，その性質，用途，出産地，製法の概略を，いわば事

注(132) 同上，文庫本 23頁。
(133) 同上，文庫本 23頁。
(134) 同上，文庫本 23頁。
(135) 「経済要略」大系本 529頁。
(136) 「経済要録」文庫本 23頁。
(137) 同上，文庫本 23頁。
(138) 「開物成務」については「易経」岩波文庫本下巻「周易繫辞上伝」，240頁。注(8)を参照。
(139) 「経済要録」文庫本 36頁。
(140) 「経済要略」大系本 535頁。
(141) 「経済要録」文庫本 36頁。
(142) 同上，文庫本 37頁。
(143) 同上，文庫本 38頁。
(144) 同上，文庫本 38頁。

典風に解説している。天工開物の法も自ら異る所以を説明している。取扱われている品目の中には注目すべき品物も少くない。信渕は天工開物の法の中，物産耕農をもって重要な産業とし，気候，土性の適宜により，その法の相異を詳細に論じている。もしこの法を学び修得しないならば，「能く生々の理を講明せざれば，万民を卒育耕農するの業に疎くして，境内を富貴せしむること能はず」[145]と結んでいるが，耕農に関しては別に「草木六部耕種法」其他の著述を作製してそれにあてている。

「開物篇」において信渕が取扱っている品物はまことに多い。「開物上篇」においては，「土石類に属する諸物十七種に分て，各々其名物を論弁し，具其製法の大意」[146]を述べており，「開物中篇」においては，「草木繁庶なる，此れを採て人民の食物・衣服・居室・器財と為す可きもの，極めて多い」[147]中より「日用最も緊要なる者を撰び，此れを植へ此れを作りて能く成熟なさしめ，此れを採収めて以て人世の需に供る」[148]＝「耕農の業」を修るの道を論じるとして，百穀以下二十種が述べられている。最後の「開物下篇」[149]においては，諸活物類（動物類で，人類の食物及び衣服・居家等に利用されるもの）の物産をわけて十五種として，その大略を述べている。いま個々の産物について言及することは省略するが，信渕は「以上三類五十二種ノ物産ヲ興スノ概略ナリ。其ノ開発製煉諸法ノ精詳ナルニ至リテハ，此ノ小冊ノ紀載スベキ所ニ非ズ。宜ク鎔造論ノ術義ニ就テ講究スベシ。夫レ国土ヲ経緯シ，物産ヲ開発スルハ，人君天地ニ代テ万民ヲ安養スルノ本業ナリ」[150]と結論している。この開物の業が信渕の経済学・経済道の基根であり，「此開物の学を明にするは経済道の原始なり」[151]と信渕は主張している。

個々の品目の生産・開物の検討をいまは省略するが，開物の学にみられる生産・開物の原理について信渕の述べているところを考えることとする。「天地の神理」[152]「天理」である。「大地は人類の本居にして，山嶽・平原は第一の宝蔵なり，池沢・河海は第二の宝蔵なり，人世日用の諸物は，皆な此の二蔵より出づ，然れども国家に長たる者，百姓を帥ゐて，此を開発せざるときは，土地をして遺利無らしむること能はず，故に四際の気候を辨じ，四土の純駁を察し，万物の化育を賛け，且其衣食を贍すは，経済道の要務にして，即ち天地の神意を奉行するなり」[153]と。同一の趣旨を多くのところで述べているが，人間の日用の諸物を生むものが大地である。これを開発するのが人である。（この開発する人とは国家に長たる者をいい，治者が百姓を帥いてこれにあたるという。）諸々の技術を駆

注(145) 同上，文庫本 39頁。
(146) 同上，文庫本 40頁。
(147) 同上，文庫本 111頁。
(148) 同上，文庫本 111頁。
(149) 同上，文庫本 176頁。
(150) 「経済要略」大系本 547頁—548頁。
(151) 「経済要録」文庫本 206頁。
(152) 同上，文庫本 40頁。
(153) 同上，文庫本 40頁。

使し，土地に遺利無からしめる，これが生産—開物の基本的な考方である。人の務めは「万物の化育を賛け……天地の神意を奉行する」[154]ところにあると抽象的に述べられているにすぎず，「労働」への自覚はきわめて低いと考えられる。また信渕は「所ㇾ謂る天工も，必ず人工を俟て，而して後に始めて全備する者なること」[155]を説き示すために各種の製法の大意を「開物篇」にて述べているという。天工と人工とはすでに述べたところであるが，「天工開物」との思想的関連をよみとることが出来る。[156]「天工開物」については，信渕は「経済要録」の巻六「開物上篇」の「薬石第九」中「砒石」[157]の事項を説明する時に言及している。砒石が農業上有効なる所以を説明し，宋応星「天工開物」十一「焙焼」中の「砒石」（藪内清訳「天工開物」東洋文庫225—226頁）を参考としている。農業生産が行なわれる基礎は「日輪は万物の父にして，大地は万物の母なり，故に万物皆日輪より其精を発生し，大地は其体を鞠養し以て此を成就せしむ」[158]であるところから，砒石が日輪の精気を補助するものとして，農耕に大益があると述べている。また信渕が「耕農の業を修る道」を詳論した書物として前述した宮崎安貞「農業全書」をあげている。信渕は農業全書を高く評価しているが，同時に安貞が「鎔造化育の神理，造化妙用の術」に通じていないこと，及び安貞が見聞し，著述した地域が一部に偏し，とくに関東，東北地方に粗であるという地域性への批判をもっていた。[159]ここで「鎔造化育の神理・造化妙用の術」[160]とは「凡そ天地の物を生ずるは，各其物に従て適宜なる気候と相応ずべきの土性ありて，強ることの為らざる者なり，然りと雖共，人は一箇小天地なるが故に，人心の霊智を以て深考遠謀り，変通転換の妙術を施行ときは，不ㇾ可ㇾ生の土地に不ㇾ可ㇾ生の物品を生ぜしめ，不ㇾ可ㇾ熟の時に不ㇾ可ㇾ熟の物品を熟せしむべし，是此を造化の妙用と云ふ」[161]である。此等の神理を精究することと耕農の業に励むことにより国益を興すことが出来る。これは言葉は異るが，安貞が致知と力行を主張すると揆を一にしている。

信渕が「経済道の原始」としての開物の学を明らかにし，自己の経済学を構想しえた背景には，18世紀以来19世紀前半にかけて，封建社会の基礎構造を動揺させつつあった経済的発展を見逃すことは出来ない。すでに先進地帯において農民による商品生産が展開し，諸産業のいちじるしい発展が現実となりつつ，その頂点にはマニュファクチュア経営が生れつつあった経済発展の現実を無視してはならない。この時代の波は広く後進地帯にまで及んで行った。思想史的に，信渕の思想形成の面よりこれをみれば，必ずしも明日な形で継承関係を指摘しえないのであるが，長い伝統的な考方の継承がそこにあり，信渕が開物論を構成しえたこととの関連において，宮崎安貞・熊沢蕃山・

注(154) 同上，文庫本 40頁。
(155) 同上，文庫本 40頁。
(156) 「天工開物」と信渕の思想との関係については既述の注(4)を参照。
(157) 「経済要録」文庫本93—94頁。
(158) 同上，文庫本 93頁。
(159) 「経済要録」文庫本 111頁及び224頁に「農業全書」がふれられている。
(160) 同上，文庫本 112頁。
(161) 同上，文庫本 112頁。

太宰春台・林子平・本多利明・藤田幽谷・会沢正志斉等の思想にみられた「生産—開物」思想を検討してみたところである。信渕が開物論を構成するにあたり，中国古代思想の中に，儒学の中に展開されている生産—開物の考方，富国についての根本的考方，洋学（蘭学）により促進された西欧文化に対する知識，実学的，合理的，科学的思惟の展開，平田神学にみる「産霊」信仰，さらに目を国外に向けた時，18世紀から19世紀にかけて，中国および朝鮮半島に形成された開物思想，実学思想の影響等に注目しなければならないであろう。

創業・開物が富国を目標として主張されており，すでに富国について述べて来たところであるが，最後に信渕が「富国篇」を中心に，「予が家の富国法」[162]と「世上・今の経済家の富国法」[163]とを対比して，国を富ますとは如何なることであり，富とは何であるかについての信渕の考方を検討することとしたい。「予家の富国法は，世上経済家の所レ説とは，其趣意頗る異なる者にして，唯た是既に説たるが如く，上は国君及び卿大夫，下は農工商賈に至るまで，心を一にし力を同くして開物の業を勉励し，境内の水陸を経営して，遺利無らしむる耳，若夫君民心を斉くし，上下一致して国事を経営するときは，物産大に興り万貨境内に充満すへし，貨物既に充満するに至ては，士民の衣食自ら富饒たるに論あることなし，夫れ貨物境内に満ち溢れ，万民衣食富饒ならば，何ぞ必ずしも府庫の充実ると充実ざるとに拘泥ことを為んや」[164]という。国土があれば必ず物産があり，必ず種々の品物を生じ，人類を養育するの食物・衣服・及び居室，器財を生産することが出来，それは「無尽蔵」[165]である。そこで「人類は……彼の無尽蔵の鍵を握り，領内の水陸二蔵より種々物品を採り出し，天地に代て人民を養育し，其児孫を蕃息せしむべきは，即ち人君天に事ふるの常務なり，所謂水陸二蔵を開き，人世日用の物品を出すを開物の業と名く。国君能く開物の学を講明し，国人をして其業を励しむるときは，万物自ら豊饒に為りて貧窮す可きの理あることなし」[166]とし，「我家の富国の法は，他なし，唯天地の神意を奉りて，水陸二蔵を開き，諸神化育する所の品物を採出し，以て世界を豊饒にせんと欲する耳」[167]であるとし，開物の業の中心を「耕農」においている。

「世上（今）経済家の富国の法」は如何なる論であるか。信渕は次のごとく言う。「今の経済家は，唯々国君を吝嗇に誘導し，聚斂を務め貨殖を専とし，府庫倉廩を充実せしめて，此れを富国と云ふ，不二亦誤一乎。」[168]であり，経済学に不明であり，其本を務めずして末を事とし，「百姓を撫御して農を励み，物を開くべきの業をば疎放にして，唯々利を争ひ相奪はしむるの政のみを施す」[169]のみ

注(162) 同上，文庫本 208頁。
(163) 同上，文庫本 208頁。
(164) 同上，文庫本 208頁。
(165) 同上，文庫本 209頁。
(166) 同上，文庫本 209頁。
(167) 同上，文庫本 210頁。
(163) 同上，文庫本 208頁。
(169) 同上，文庫本 215頁。

である。財用不足すれば民より奪い，金銭を借り，銀札[170]（「銀札を製するが如きの類のみ多し，歎すべきの至なり」）の発行をなすなど，皆富国とはならず，政道の大本を知らぬところである。

以上，信渕の経済之学を創業・開物・富国を軸として検討してきた。信渕は全体を総括し，結論して，「貧国を富貴せしめんことを欲せば，宜先づ経済道を講明すべし。夫れ境内を富贍し，財用を充実せしむるには，君臣心を合せ，厳く其暮しを倹素質薄にして財用を餘裕あらしめ，（此点の説明は「創業篇」の趣旨である）然して後に開物篇に論じたる如く……略……各々其培養製造の精妙を極め，諸般の物産を興して食物を饒多すべし，殊に農業は……略……上品なる物産夥しく生ずる事なるを以て，自国に用ひ餘る品類をば，金石，草木，活物の三種共に悉く此れを会聚し，他邦に輸りて交商すべし」[171]創業・開物によって富盛となり，「其上にも極て広大隆盛に為さん」[172]とすれば，「通移開闔法」「合壁融通法」「垂統泉源法」等があるとして，信渕の経済之学は政治論へと展開して行ったのである。

信渕は「新政の最緊要なる急務凡そ十八箇条」[173]を論じた時，その第十八番目の項目として交易（商）を取扱っている。まず国内交易を万全にするために交通機関の整備の必要をとき，陸上交通上不便な河川などには「通移開闔の法」[174]を用いて大工事をなして整備をほどこし，また要地には海港を開き，海港にては交易を行う。交易の法は「合壁融通の法」[175]によるのである。（別に海浜に接する村々では製塩と漁業をいとなましめる。これは「漁民維持法」[176]による。交易と漁業とによりて海国を富貴にすることが出来る。）交易を通ずることによって，「先づ財用の融通を宜く為し，自国他邦の貨物を多く輻湊せしめ，舟車の運送を便利にし，遍く諸州の物価を校り，審かに其軽重を考へ，多き場所の物品を買入れ，其少き土地に輸りて此を売捌き，有る所の産物をば無き処に移して，物価の昂低を転換し，貴穀を交易して互市の利潤を収めば，其国次第に富貴」[177]させることが出来る。富盛となった国家を長久に継続し，衰微すること無きようするために，信渕は「垂統の良法」[178]を行うべきことを主張する。垂統法は「世界を一新する大業」[179]であり，信渕はこのことを論ずるために「垂統秘

注(170) 同上，文庫本 214—215頁。
(171) 同上，文庫本 224—225頁。
(172) 同上，文庫本 225頁。
(173) 同上，文庫本 233頁。
(174) 通移開闔法，「他邦に物産を出すこと最目在に利を興す」同上，226頁に便なるように，陸上，河川，海洋の交通網を整備することである。そのため障害となる諸制度を廃止する必要があり，そのためには「大経済法」がある。国内市場の形成の意図をみることが出来る。交易の利を収めることである。
(175) 合壁融通法，交易を通ずること，「財用の融通を宜く為し，自国他邦の貨物を多く輻湊せしめ，舟車の運送を便利にし，遍く法州の物価を校り，審かに其軽重を考へ，多き場所の物品を買入れ，其少き土地に輸りて此を売捌き，有る所の産物をば無き処に移して，物質の昂低を転換し，貴賤を交易して互市の利潤を収めば，其国次第に富貴す。」同上，文庫本 233頁。
(176) 漁民維持法，佐藤信季が安永九年に著作し，信渕が其後校訂したもの。信渕の意のあるところを知ることが出来る。漁民を敵重取締ることをいう，滝本誠一編「佐藤信渕家学全集」上巻に所収。
(177) 「経済要録」文庫本 233頁。
(178) 同上，文庫本 228頁。
(179) 同上，文庫本 228頁。

録」を著述している。

わたくしは，信渕の経済学の全体系が，創業・開物・富国・垂統と組織づけられ，その基根に「開物」が位置されていることを検討してきたのである。これによって，信渕の経済学の基根が何辺にあったかを知ることが出来る。

むすび

以上きわめて簡単ではあるが，わたくしは安貞・蕃山・春台・子平・利明・幽谷・正志斉そして信渕の経済思想の一端に若干の考察を加え，農学および経済論の実学的主張の根底，信渕のいう基根に，生産＝産業開発＝「開物」への洞察とその発展を願望する心情とが存在していたことをみた。「開物」とは生産力発展の理論である。思想家のおかれた歴史的状況下において，彼等の主張する開物の対象が主として農業生産―とくに狭義には米穀生産に，さらに商品作物生産をもふくむが―を中心として開物論を展開した場合や，より広範囲に一般の産業開発―農業のみでなく水産・鉱産・工業生産を内容とする―へと拡大して開物論を結実した場合をも生んでいる。これらはともに開物が富と意識された物的素材＝財＝使用価値形成の理論であると把握し，開物への努力とその成果の獲得とが「富国」ひいては「富国強兵」実現の基礎であるとの認識に到達し，思想家はそれぞれ異なった経済論を構想していったのである。この土台となった開物理論は，天・地・人三者を関連づけ，人が天地＝自然の大徳に奉行するところに成立し，地利を尽すために，労働＝力行と開物のための致知＝術の二つの要件が求められるという同質の基調を強く持っていた。かかる開物論を基礎にもちつつ，生産において形成された富をそれをつつむ商業社会（商品貨幣経済社会）と関連づけ，その接触によって生ずる諸問題を考察することや，生産＝産業開発＝開物の発展を制限し，阻止し，あるいは産業を破壊する諸要素・諸条件を認識し，これらを克服し，生産力の発展を意図せんとしたことや，開物より生れる成果を生産の直接の担手に与えることをせず「富国強兵」のため収奪することや，視野を国内に限定せず海外に転ずることや，等々をふくみつつ，そこにそれぞれ異なった経済論が生れたのである。

開物論を基礎として多くの経世家によって構想された異なった経済論についてのより立ち入った叙述は別の機会にゆずりたい。

（経済学部教授）